

## 内野町における盆踊りの復活の試み

森 下 修 次・松 浦 良 治

### 1. はじめに

新潟には祭事等に関わる多くの伝承音楽があるが、新潟大学の地元でもある新潟市内野町にも様々な伝承音楽が存在する。内野町では毎年9月14日、15日に内野祭が行われている。これは各町内一番町から七番町と大学南や広通町などの新興住宅地の自治会がそれぞれ山車をたてて町内を練り歩くものである。これら祭りに関する音楽では先太鼓<sup>1)</sup>や山車に乗せて演奏される「数え歌」などがある。なお、内野祭は春と秋の2回行われるが、一般的に秋の祭りの方が内野祭として知られており、ここでは内野祭を記されているときは秋の祭りを示すものとする。

盆踊りは、先祖の霊が帰ってくるとされる「盆」と呼ばれる時期、概ね7月中旬から9月中旬頃のに時期に行われていた舞踊である。かつて内野の各町内では盆踊りもそれぞれ独自に催されていたようであるが、近年の娯楽の多様化に伴い、内野町周辺地区の二の町、三の町、後述の地元新潟西商工会主催の盆踊りなどを除いて行われなくなった。

そこで我々は地元の伝統文化が失われるのではないかと危機感を持ち、微力ながら何らかの形で地元の伝統文化を維持、再現に貢献できないかと活動を試みた。内容は概ね次の通りである。

- ① 地元の音楽文化の分析とメディア（映像・録音）による保存。
- ② 大学の学生も地元の伝統的な祭等に参加させ、学生の教育に生かすと同時に地元の指導していただく方々にも意識の高揚を促す。
- ③ 地元の中学校でも祭囃子の授業を行い、地元の子どもたちにも地元の伝統音楽の良さを知っ

てもらう。

- ④ 盆踊りの様にかつて行われていた行事や音楽を復活に協力し、かつて地元にあった文化のすばらしさを地元の方々に再認識していただける機会を持つ。

今回の報告は④にあたるもので、途切れて久しい盆踊りを復活させるというものであった。途切れてから17年余りが経ったものの幸い多くの方々が盆踊りを覚えておられた。そこで手始めに学生を対象とした講習会を催すことにした。

### 2. 七番町盆踊りの踊りの講習

2001年7月15日、新潟大学の学生8名を対象として盆踊りの講習会を開いた。地元の講師役の方々も8名参加していただけた。場所は吉田稲荷神社の本殿であった。吉田稲荷神社は宮司、禰宜はいないが地元七番町で大事に保存されている神社で、地元の寄り合いに使われるなど公民館的機能も持つ。なお、吉田稲荷神社があるので七番町は別名「稲荷組」「稲荷町」とも呼ばれている。



図1 盆踊りの講習風景  
(内野町吉田稲荷神社、2001年7月15日)

### 3. 新潟西商工会主催の盆踊りへの参加

15年ほど前までは、毎年内野祭の時期に商工会主催による盆踊り大会が内野駅前で行なわれていた。しかし、盆踊り大会はカラオケ大会に変わり現在に至っている。その後、2000年より、新潟西商工会主催により8月初旬内野駅前で開催される夜店祭りの一環として盆踊り大会が催されるようになった。主催者によれば、内野町で長期に渡って盆踊りが途絶えたため「囃子方(笛、太鼓、唄)」の伝承者が見つからず、隣接地域の五十嵐二の町に依頼して行なわれているということであった。

夜店の方は若い人たちも大勢訪れ大変盛況であるが、盆踊りの方は夜店に比べ閑散とした印象は拭えない。内野祭は中心となる10代後半から20代前半の若者が戻ってきた感もあるが、この盆踊りは残念ながら中年以上の世代がほとんど占めているように思われる。

今年2002年8月2日に行われた盆踊り大会は内野盆踊り復活のことがあったので、次の形で参加させていただいた。

- ① 学生(有志)を踊り手として参加させる。
- ② 二の町の伝承者の囃子に松浦(笛)、森下(太鼓)の囃子および我々と内野の伝統芸能を共同で研究している伊野義博氏(唄)の3名を加えていただく。

囃子の演奏の反省点など多々あったが、内野盆踊り復活に向けて多くの得るものがあった。なお、昨年までは支所東横の空き地であったが、今年は支所の筋向かいに新設された駐車場で行われた。



図2 新潟西商工会主催の盆踊り  
(新潟市西地区分庁舎駐車場, 2002年8月2日)

### 4. 七番町吉田稻荷神社境内での盆踊りの復活

内野盆踊りの発祥については定かではないが、大正時代の中期にはすでに踊られていたということである。以来、内野盆踊りは最近まで伝承されてきた。松浦の記憶によれば、昭和30年～40年代の期間、七番町では毎年催されていたが、1985年あたりを最後に途絶えてしまった。松浦は商工会の盆踊り大会を参考に、七番町でも盆踊りを復活すべく自治会長朝妻康春氏に相談したところ快諾を得た。そこで、以



図3 復活内野七番町盆踊り大会の風景(3枚組)  
(内野町吉田稻荷神社境内, 2002年9月15日)

前のように内野祭最後日の夜に吉田稻荷神社境内における「盆踊り大会」を催されるよう働きかけることになった。幸い七番町の内野祭実行委員の方々も「盆踊り大会」の復活を望む声が多く、実行委員の方々が中心になって、囃子方、踊りなどの練習計画を立て実行に移すことになった。9月になると例年内野祭の当日まで連日準備に余念がないが、今年はそれに加えて盆踊りの練習もほぼ毎晩行われた。9月15日の当日は、内野祭実行委員の方々により太鼓の設置台、照明機器や音響装置、雰囲気づくりのための提灯の設置などが行なわれた。七番町々内には自治会の回覧板によって同夜の盆踊りが広告されていたので、夜8時頃には稲荷神社に50名程度の人が集まった。囃子方は予め決められてはいたが、かつて七番町に住んでいた人などの飛び入りなどもあって、たいへん盛況であった。その時の様子を図3の3枚の写真で示す。

## 5. 内野盆踊り（七番町）の囃子と踊り

復活盆踊りに用いられた内野盆踊りの囃子と踊りは次の様なものであった。

### (1) 歌詞

内野盆踊り唄の歌詞は元々即興的に歌われたものと思われる。歌詞の内容は妖艶なものが多く今日では再演しにくい内容のものも含まれているが、かつての日本におけるおおらかな性を表現しているともいえる。なお、歌詞については様々なバリエーションが存在するが、ここでは筆者の一人、松浦の篠笛の師匠である佐藤秀雄氏が採録したものと松浦の父、松浦治氏（大正7年生、稲荷町）が記憶を元に記したものを以下に示す。

- ・イヤー 今日の踊りは まるでのうて四角いえ
- イヤー もっとまるうく 頼みますいえ
- ・イヤー 一つ歌います 松の木の下でいえ
- イヤー 松の葉のように こまごまといえ
- ・イヤー 会えばうれしい 別れがづらいえ
- イヤー 会うて別れが ないばよいえ
- ・イヤー 踊り見に来たか 立ち見にきたかいえ
- イヤー ここは立ち見の 場所じゃないえ
- ・イヤー 入れておくれよ かゆくてならぬいえ
- イヤー 私しゃ一人が かやの外いえ
- ・イヤー おらの可愛いのは
- 太鼓たたきと笛吹き（さあ）可愛いえ

- イヤー わき（がわ）の踊り子は なお可愛いえ
- ・イヤー 蛭可愛いや 草場のかげに一え
- イヤー 忍び男の 道照らすいえ
- ・イヤー 流し窓から こんにゃく玉投げたいえ
- イヤー 今夜来いとの 知らせだないえ
- ・イヤー 腹のでっかいカカア
- でんぐるま（かたぐるま）に乗せていえ
- イヤー 二百十日の かざよけにいえ
- ・イヤー してもしたがらる 十七、八娘いえ
- イヤー 今日もしてきた 針仕事いえ
- ・イヤー お月様さえ 夜遊びなさるいえ
- イヤー おらも夜遊び 無理はないえ
- ・イヤー 盆の十三日が <sup>とし</sup>年に二度あればいえ
- イヤー 親の墓所へ 二度参るいえ
- ・イヤー 踊り踊るなら しなよく踊れいえ
- イヤー しなの娘よいを 嫁にするいえ
- ・イヤー 盆だてがんね なすの皮のぞうすいらいえ
- イヤー おじがおこって 鍋投げたいえ
- ・イヤー 若えしよ おなごども 勢いがのうて困るいえ
- イヤー もっと勢いよく 頼みますいえ
- ・イヤー 出せ 出せ 出せ 出さなきゃ破るいえ
- イヤー 娘 出さなきゃ 壁破るいえ
- ・イヤー おらが若いときゃ 角田山かついだいえ
- イヤー 今は時々 どれも気になるようでかつがれぬいえ
- ・イヤー 咲いた桜に なぜサ駒つなぐいえ
- イヤー 駒が勇めば 花が散るいえ
- ・イヤー 私しゃ 世間から 飛び入り音頭いえ
- イヤー 歌にのるやら のらぬやらいえ
- ・イヤー 信州信濃の 新そばよりもいえ
- イヤー 好いたあなたの そばがよいえ
- ・イヤー 会うて通えば 千里も一里いえ
- イヤー 会わず帰れば また千里いえ
- ・イヤー 今宵一夜は 浦島の太郎どんいえ
- イヤー あけてびっくり 玉手箱いえ
- ・イヤー そろたそろたよ 踊り子がそろたいえ
- イヤー 稲の出穂のように よくそろたいえ
- ・イヤー しめて踊られ 今晚サァ限りいえ
- イヤー 明日の晩から 踊らせぬいえ
- ・イヤー 花が見たいなら <sup>いなり まちさか</sup>稲荷町下るいえ
- イヤー 電信柱に 花咲かすいえ

（以上 佐藤秀雄氏より）

- ・イヤー 花が見たいなら 稲荷町さがれいえ
- イヤー がんき柱に つかみ鼻いえ
- ・イヤー 竹の切り口に しこたんこたんと
- なみなみたっぶり たまりし水はいえ

## 内野盆踊り (稲荷町)

♩ = 90 ~ 120

唄

イヤ ——— ぼん がー き た て が ん ね な す の

篠笛

太鼓

か ——— わ の ぞうすい ら い え (ヨイ ヤ サー ヨイ ヤ サ)

(× は 棒 打 ち)

(皮 打 ち)

イ ヤ ——— お じ が は ら た っ て な ベー

な げ た い え

図 4 (1)

イヤー 澄まずにごらず ハァ波たたずいえ  
 ・イヤー おらが若いときゃ 角田山かづいたいえ  
 イヤー 今は髪かみの毛が 真っ白しろになって

力がなくなって かづかれぬいえ  
 ・イヤー 花が見たいなら 稲荷町しんがわつみさがれいえ  
 イヤー 新川堤しんがわつみで 花見酒いえ



図 4 (2)

- ・イヤー 佐渡のみやげに おけさをなろていえ  
 イヤー 歌い出すたび 思い出すいえ  
 (以上 松浦治氏より)

## (2) 盆踊りの囃子

盆踊りの囃子は歌い手と和太鼓、篠笛がひとつと  
 なって延々と続けられる。歌詞は先ほど示したとおり  
 だが、即興的に歌われることもあったらしい。篠

この部分が追加されたところ 以下略

※この皮打ちが重要なアクセントになる。

図5 歌詞が長い場合は上記のような形(一例)で挿入される。

笛や太鼓も細かなバリエーションは演者の数だけあるといえるぐらい存在するが、大まかな構造は図4の楽譜のようになっている。伝承者の一人である松浦が周りの演奏や記憶を頼りに採譜した。

楽譜には佐藤氏採録の14番目の歌詞が変形したもの(「おこって」が「はらたって」に変化している)を例として掲げている。他の歌詞も同じような譜割りで演奏されるが、例えば松浦治氏の「竹の切り口に…」といった節に入りきらない歌詞の場合は図5の楽譜のように、追加部分に和太鼓の皮打の音をアクセントとして一発入れ、勢いを付けて演奏している。

また、盆踊りは延々と休み無く続けられるため、和太鼓奏者、篠笛奏者は唄が入っているところで途切れ無いように交代する。

括弧書きの「ヨイヤサーヨイヤサ」は踊り手の掛け声で、歌い手が前節歌い終わるのに呼応して掛けられる。

### (3) 踊りの動き

踊りは7小節14拍で一巡するようになっていて、2小節単位で曲が進む音楽とは必ず「ずれる」ようになっている。このことは小節の1拍目さええば、音楽のどこから入ってもどこで終わっても問題

ないということであり、延々と繰り返されるにはむしろ都合が良いと考えられる。このような構造は他の盆踊りにもしばしば見られる形である。動きは図6の様になっている。全体的にやや「よたった」様な感じで踊られる。型が「ばしっと」決まるような動作は見られない。

図の①は最初の位置である。普通は延々繰り返して踊るので、この時点で⑫(図6b)と同じく一回拍手を入れる。拍手のあと左足を引いて②の半後ろ向きの状態になる。ここが1拍目である。その後③の状態になる。ここは2拍目に当たる。右手を降ろすと同時に左手を上げ、左足をつけると同時に前の方をむきかける。この状態が④で3拍目に当たる。⑤の4拍目のときに正面を向く。5拍目では⑥の状態になる。この拍では少し間延びした動きになる。

⑦は7拍目の状態である。⑥の状態から前に進む。⑧は9拍目で前に進むと同時に手を斜め下にかざし、⑨の前の動きに入る。⑨では手を前にかざすと同時に右足の股を上げる。ここが10拍目になる。⑩は11拍目で⑪は12拍目になる。ここでは単純に前に進む。⑫は13拍目で拍手を一回打つ。14拍目は②の動きにはいるため右後ろを向きかけた状態となる。



図6a 盆踊りの踊り方（前半）

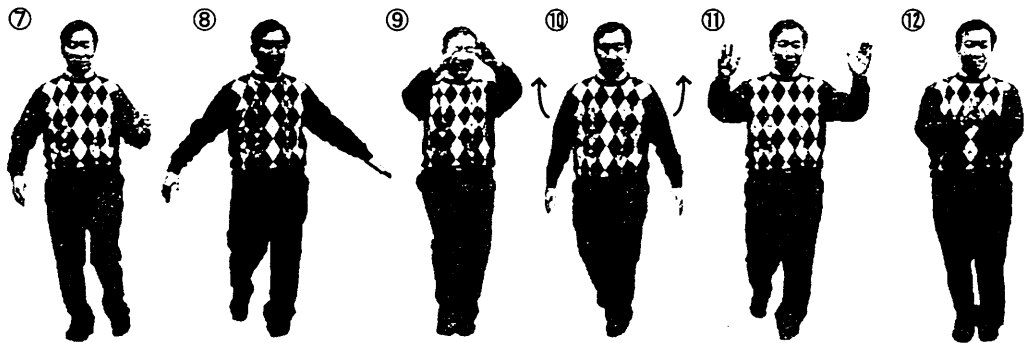


図6b 盆踊りの踊り方（後半）

## 6. 今後の課題

今回のこの論文は地元の人々の協力により盆踊りの復活というひとつの形を成したため、記録の意味を込めて執筆したものである。しかしながら、内野の伝統音楽の伝承にしろ分析にしろ、まだまだ始まったばかりである。伝承、教育、分析といった教育人間科学部に所属するからこそできる多角的な実践と研究をさらに続けていきたい。

## 文献

- 1) 伊野義博, 松浦良治, 森下修次 (2002) 「祭囃子の教材化試案—内野先太鼓の事例から—」新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター「教育実践総合研究」創刊号 pp. 31-46